

特別支援教育に携わる教師の専門性を向上させ、担保するための実践的研究

－特別支援学級教師に焦点を当てた専門性向上パッケージの提案－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 武井恒

1. 問題と目的

(1) 研究の目的

本研究は、2年計画の1年目である。2年間の研究を通して、教職経験年数や学校種を問わず、特別な支援を必要とする児童や生徒への一定の指導や支援ができる、教師のための関わり方のヒントになる資料やプログラム（以下、専門性向上パッケージ）を作成することを目的とする。1年目の研究の目的は、小学校の特別支援学級の現状把握と特別支援学級教師のための専門性向上パッケージの作成及びその提案である。

(2) 目的設定の背景

i. 特別支援教育を必要とする児童生徒数の増加

文部科学省（2019）によると、図1のように日本における特別支援教育を必要とする児童・生徒数は増加傾向にある。とりわけ小中学校での増加が顕著である。

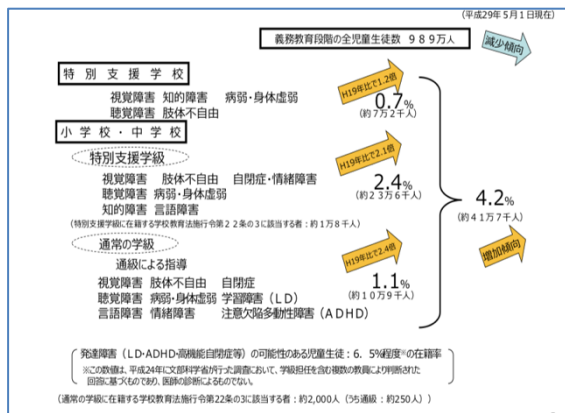


図1 日本の特別支援教育の現状について
山梨県における特別支援教育を取り巻く背景に目を向けると、特別支援学級や通常学級

においても特別支援教育を必要とする児童・生徒の数が増えている現状がある。

山梨県教育委員会（2020）によると、令和元年5月1日現在で、通常学級では3239人（通級による指導を利用している児童・生徒を除いた人数）の児童・生徒が何らかの特別な支援が必要であると示されている。また、特別支援学級については、小学校に395学級、中学校に180学級、計575学級が設置され、1820人の児童・生徒が在籍している現状である。だからこそ、あらゆる教師に特別支援教育の専門性が求められる。

ii. 求められる専門性

山梨県教育委員会（2020）では、「やまなし特別支援教育推進プラン2020」の中で、「専門性の向上」、「特別支援教育の充実」、「特別支援学校と他校種との人事交流の促進」が特別支援教育の中での課題として挙げられている。また、竹林地（2014）は、「特別支援学級担任者の専門性の向上については、過去、たびたび提言等がなされてきたが、専門性を担保する効果的な教育行政施策の実施には至っていないと思われる」（p.75）と述べている。日野ら（2019）も、「特別支援教育担当教員の専門性を高めることが、今後の特別支援教育の充実を図る上で、さらに重要になってくると考えられる」（p.92）と述べている。

以上のことから専門性や指導力の向上は、特別支援教育に携わる教職員に求められる基本的かつ重要な課題であると考えられる。

また専門性の向上とともに、それを担保する

仕組みづくりも大切である。多様化する実態に対応するために、教職員には専門性が求められる。筆者の所属する特別支援学校では100名以上の教職員が在籍するが、教職員歴に差があっても、各々の教師は一定の知識・技能を有し、児童・生徒に教育活動を提供しなければならない。一方で校種にかかわらず、子どもの学びを保証する必要がある。特別な配慮を要する子ども達は、特別支援学校だけでなく、特別支援学級や通常学級にも在籍しており、日々対応する中でそれぞれの教師が悩みながら指導に当たっているのが現状である。中には、経験のない、あるいは経験の浅い教師が特別支援学級の担任を任されることもある。だからこそ、学校種を超えた専門性を共有する仕組みがあるとよい。さらに、特別支援学校のノウハウを特別支援学級や通常学級でも生かしたい。反対に、特別支援学級や通常学級での学級経営や個別指導のノウハウを特別支援学校でも生かせることが理想である。お互いの専門性を共有することで、今困っている子ども達の一助となる価値ある取組を目指していくことが重要である。

以上の理由により、今年度は特別支援学級教師に焦点を当て、研究を進めていくことにした。

2. 研究の方法

(1) 質問紙調査

(2) 専門性向上パッケージの作成

(3) 指導実践

実習校：山梨県内小学校知的障害特別支援学級（以下、T小学校とする）

期間：令和2年5月～12月（計200時間）

使用資料：サポートシート

以下、(1)～(3)の研究の方法に即し、その詳細を記述する。

3. 研究の内容

(1) 質問紙調査

i. 目的

特別支援学級（知的、自情）担任の実践上の

課題を明らかにし、解決法の一つとして専門性向上パッケージ開発のための基礎資料とすることを目的とする。

ii. 調査対象

特別支援学級担任の教員。または、過去担任したことがある教員。

iii. 調査の状況や手続き

2020年6月19日～7月31日の間で、実習校（小学校5名）と他校（県外含む）の知り合いに依頼して、特別支援学級担任を紹介してもらった。その先生方に、質問項目を送り、紙面またはウェブで回答してもらい、回収した。合計31名より回答を得た。

iv. 調査項目の作成のための基礎資料

調査項目の作成に当たっては、千葉県総合教育センター 特別支援教育部（2015）の「特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査」を基礎とした。

アンケート項目については以下である。

v. アンケート項目

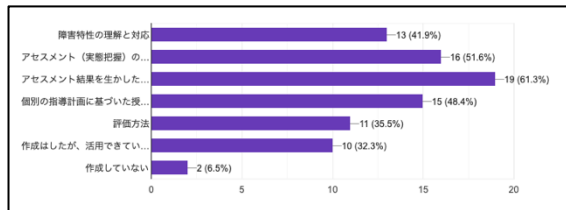
- | |
|--------------|
| ①回答者について |
| ②学級経営について |
| ③個別の指導計画について |
| ④授業について |
| ⑤関係者との連携について |
| ⑥専門性について |

なお⑥については、専門性について現状把握するため、山梨県立かえで支援学校（2018）を参考に筆者が新たに追加した項目である。具体的な項目については次の6つからなる。

- | |
|----------------------|
| 専門性1：障害特性の理解 |
| 専門性2：子ども理解 |
| 専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる |
| 専門性4：学級づくり・授業づくり |
| 専門性5：保護者や関係機関との連携 |
| 専門性6：研修への意欲・向上心 |

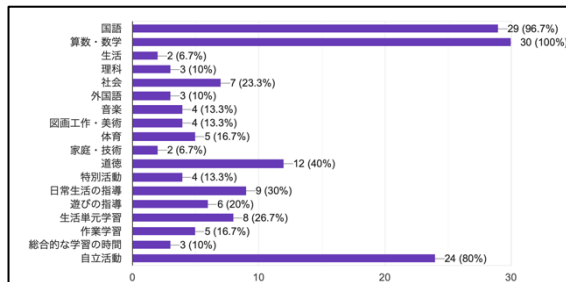
vi. アンケート結果と考察

〔表1〕 個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題 (n=31)



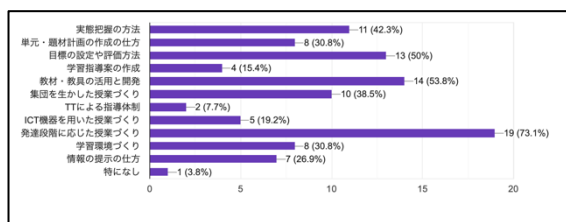
個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題は、「アセスメントの方法」や「アセスメント結果を生かした指導目標や手立ての考案」が多かった。

〔表2〕 特に困っていることや課題のある教科等 (n=31)



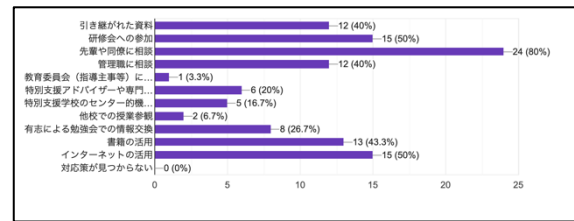
困っていることや課題のある教科等は、国語、算数が最も多く、次いで自立活動であった。

〔表3〕 授業づくりに関して困っていることや課題 (n=26)



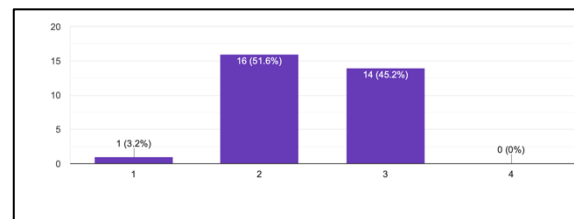
授業づくりに関して困っていることは、「発達段階に応じた授業づくり」が最も多く、次いで「教材・教具の活用と開発」「目標の設定や評価方法」であった。

〔表4〕 困っていることや課題を解決するための方法 (n=30)



困っていることや課題を解決するための方法は、「先輩や同僚に相談」が最も多く、次いで「インターネットの活用」であった。特に、教職経験10年未満の先生の割合が多かった。

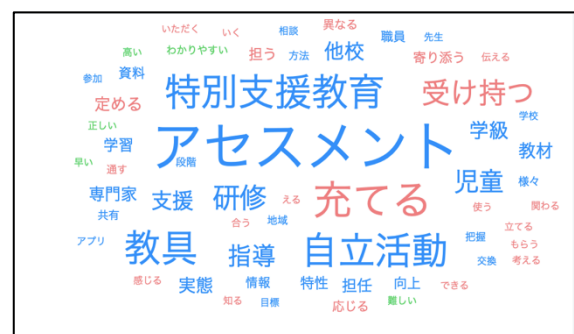
〔表5〕 専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる (例、～が必要だから今～をする等) (n=31)



4件法 (1:できない 2:ややできない 3:ややできる 4:できる) により調査をした。

前述の専門性1～6の項目の中で、免許状を所有している先生は、どの項目も3 (ややできる)、4 (できる) に回答する割合が高かった。しかし、「専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる」の項目に関して、半数以上が2 (ややできない) に回答していた。このことから、専門性がある程度高い先生でも、将来を見据えた指導計画に関しては、不安をもっていることがわかった。

〔表6〕 専門性を高めるための対応策 (n=29)



AI テキストマイニング by ユーザーローカル (<https://textmining.userlocal.jp>) を使用して自由記述をまとめた結果である。

以上の調査結果から、専門性向上のために次の2点のキーワードが浮かび上がった。

- ①アセスメント (実態把握)
- ②将来を見据えた視点

この2点を取り入れた指導実践をしていくことにした。

(2) 専門性向上パッケージの作成

i. 専門性向上パッケージ概要

筆者のこれまでの指導実践から、専門性向上に必要と思われる項目を6つにまとめ、専門性向上パッケージの内容とした。その概要は以下のとおりである。図2に示す。

- ①サポートブック (サポートシートを集めたもの)
- ②教材バンク
- ③デジタル教材
- ④QA シート
- ⑤研修パッケージ
- ⑥情報

今回の研究では、①サポートブックを構成するサポートシートを取り上げた。



図2 専門性向上パッケージ概要

ii. サポートシート

図3のようにサポートシートは、子どもの行動から背景を探り、よりよい支援、指導をするためのツールである。すぐに「How to」を求める思考ではなく、行動の背景を探る「Why」

の視点を大切にすることをその特徴とする。また、このシートでは応用行動分析の観点から子どもの行動の背景を探り、必要な指導や支援を行う。本研究の目的の一つは、サポートシートが専門性向上のためのツールとなり得るか検証することである。

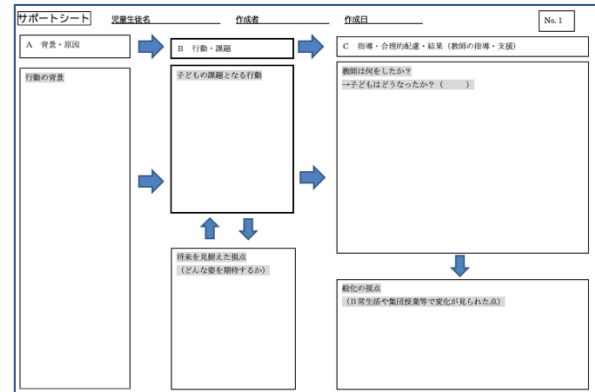


図3 サポートシート

サポートシートの記入例や記入の仕方については、筆者が動画で解説をしている。右記のQRコードを参照していただきたい。



なおサポートシートのポイントは、行動の背景を考える視点と将来を見据えた視点を取り入れたことである。行動の背景を考え、記入することで、子どもを多面的に実態把握することができる。また、行動の課題から将来を見据えた姿を考えて記入することで、系統性のある指導や支援を意識することもできる。

ところで、サポートシートはあくまでよりよい指導や支援をするためのツールであり、記入することが目的ではない。記入する中で、様々な課題となる行動の背景、及び指導、支援を探っていくことが大切となる。

(3) 指導実践

i. 使用対象クラスと対象者

T 小学校知的障害特別支援学級2年生2名、3年生2名及び担任1名 (特別支援学級担任2年目、特別支援学校教諭免許状なし)

ii. 活用方法

第一段階として、特別支援学級担任に、筆者がサポートシートの見本を見せ、書き方等を説明した。図4のように、担任がまず子どもの行動の課題（B欄）を記入し、続いて考えられる背景（A欄）を複数記入する。行動の課題と合わせて、将来を見据えた視点（3年後に期待する姿）も記入する。

図4 サポートシート記入 第一段階

第二段階として、担任と筆者が子どもの課題に対する指導、支援の実際を複数考え、記入する（C欄）。そして、指導、支援に対しての子どもの反応を書く。効果の有無を記入することで、指導、支援の検証を行った。実践した結果が図5である。

図5 サポートシート記入 第二段階

第三段階として、指導、支援の結果から般化（日常生活や他授業で変化が見られた点）の視点を記入する。それらをまとめたものが図6である。

図6 サポートシート記入 第三段階

iii. 結果と考察

第一段階の記入が7月、第二段階の記入が9月、第三段階の記入が11月であった。実際の指導は、特別支援学級にて行った。複数の課題の中から、優先順位をつけて一つ一つ取り組んだ結果、短期間ではあったが、子どもの変容が見られた。

例えば、行動の課題としてM児（小3）の「落ち着いて座れず、他の子の学習を邪魔してしまう」が挙げられた。M児は、活発であるがゆえに、体を動かすことやおしゃべりが授業中多く見られた。注意して観察する中で、行動の背景として、「集中しづらい、注目してほしい、体を動かしたい」などが担任から挙げられた。合わせて記入された将来を見据えた視点は、

「人の邪魔にならないよう、音をあまり立てずに座る」である。つまり、自己コントロールができることを目指している。そこで、筆者と担任が指導、支援の内容を複数考え、サポートシートに記入した。例えば、「約束を決める」、「安定するものを触る」、「ご褒美システムを活用する」などである。それぞれ、実践する中でM児の行動が変わっていった。特に効果的だったのは、「安定するものを触る」とことと「ご褒美システム」である。M児にとって、落ち着きがない背景の一つに「安心できない」ことが考えられた。そこで、担任は授業中でも気持ちが安心できる触れるものを用意した。それがM児にとっては「磁石」だった。M児に、黒板に貼ってある小さな丸磁石を複数渡すと、

くっつけたり、離したりすることを机上で繰り返した。これまでは、すぐに立ち歩くことが多かったが、交流級の授業でも磁石を触ることで落ち着きが見られるようになった。また、頑張った行動に対し、担任はシールを渡すことにした。これは、努力の過程を目に見える形にした工夫である。またM児が他の子の邪魔をしてしまう背景に、学習への意欲や達成感が少ないことが挙げられた。だからこそ、シールを用いて学びの過程を視覚化することで、M児に学習への意欲や達成感を得られるようにした。この取り組みは、M児の行動を確実に変えた。頑張った分だけシールがもらえることが意欲となり、座って学習に取り組む時間が増えたからである。特別支援学級で学習に取り組む時間が増えたことや学びの達成感を得られたことで、交流級でも落ち着いて座って授業に取り組む姿が見られるようになった。

M児以外の児童にも、同じようにサポートシートを用いて実態把握をし、指導、支援を行ってきた。もちろん、効果が見られなかった取り組みもあったが、行動の背景と指導、支援の取り組みを複数考えられたことで、担任の子どもへの関わり方が多面的になった。

本研究の成果の一つとして、取り組んだ16事例のサポートシートをまとめてサポートブックを作成した。その目次が図7である。

サポートブック (各教科等編) 目次一覧			
教材バンク登録済み		SSあり	
国語			
事例番号	使用教材	作成者	課題
1	ビジョントレーニング、文字分解	K教諭、武井	文字の形を記憶しづらい。
6	カラムシート	K教諭、武井	漢字の形を捉え、覚えることができない。
16	カラーボールペ	K教諭、武井	盲字が苦手。
算数			
事例番号	使用教材	作成者	課題
日常生活			
事例番号	使用教材	作成者	課題
2	タイムタイマー	K教諭、武井	待つことが難しい。
3	絵本、お話づくりカード	K教諭、武井	自分の思いがうまく話せず、固まる。
4	まきばり	K教諭、武井	一言指示についていけない。
5	できたことブック	K教諭、武井	難しい問題をやろうとしない。
7	パランスクッション	K教諭、武井	姿勢保持が難しい。
8	人形	K教諭、武井	自分から友達に声をかけるのを嫌がる。
9	ダンボールオセロ、しっぽ引き	K教諭、武井	ライバル意識が強く、負けたくない。
10	かぶらナイス	K教諭、武井	自分の好きな話をずっと続ける。
11	伝説チェック表	K教諭、武井	授業中に寝る。
12	伝説しりとり	K教諭、武井	友達をからかう発言がある。
13	トークエピソード	K教諭、武井	風下で歌ったり、走ったりする。
14	ステック消しゴム	K教諭、武井	消しゴムで線画に消すことができない。
15	センサリーグッズ(磁石)	K教諭、武井	友達の手を邪魔をする。

図7 サポートブック目次

一つのサポートシートが同じような行動の課題のある子どもに、そのまま活用できるわ

けではない。しかし、指導や支援を考える一助になるのではないかと考える。特別支援を要する子どもたちに対応するとき、経験が浅ければ不安となる。それでも、保護者や児童・生徒からは経験歴にかかわらず、「先生」と呼ばれる。だからこそ、サポートシートがそのような子どもたちへの関わり方のヒントになると良い。そのためには、多種多様な事例が必要である。ある子どもにうまくいかなかった指導、支援も別の子どもにはうまくいくかもしれない。今後の課題としてまず行うことは、こうした事例を集めていくことである。

4. 本年度の研究成果と来年度へ課題

(1) サポートシートの成果と課題

T小学校特別支援学級担任に、サポートシートについての感想や意見を、紙面アンケートにて回答してもらった。

i. サポートシートの良いと思った(書きやすかった)点など

- ①C欄の「指導・合理的配慮・結果」は何をすればいいか明確に分かって良かった。
- ②C欄の「子どもがどうなったのか」の視点は、何が達成できたか分かり、教師側のやる気にもつながった。
- ③将来を見据えた視点、どんな姿を期待するか、具体的に考えられた。

①については、障害特性の理解と子ども理解につながり、課題の背景を考えることで、指導や支援が複数挙がるだろう。何をすべきかが明確になり、指導や支援の引き出しが増えると思われる。

②については、指導に対する意欲の向上につながる。実際に、指導や支援を行った結果、子どもがどう変わったかの視点が大切である。つまり、子どもの事実に沿うことが重要だ。特に、有効でなかった指導や支援はそのまま継続するのではなく、別の手立てを考えるべきである。また、有効であった指導や支援はサポートブックにまとめることで、他の教師に共有できる。これが結果的に専門性の担保につ

ながっていく。

③については、将来を見据えた視点につながる。前述の課題にも挙がっていたように「将来を見据えた視点」は、特別支援学校教諭免許状を持つベテランの先生でも課題と感ずる点である。サポートシートを記入する中で、その視点を意識することができる。また、子どものどんな姿を期待するか考えることで自ずと指導、支援は変わってくる。

ii. サポートシートの書きにくかった(書くときに迷った)点

- ①A欄の「背景・原因」とB欄の「行動・課題」の違いがわからないものもあった。
- ②A欄の「背景・原因」が、自分の力では、把握できないところがある。別の先生に見ていただくことで、明確になる。

これらは課題点となる。特に、②の複数の視点で考えることは今後、積極的に取り入れていくべき点である。

そこで、サポートシートの書き方のステップを考えた。次の4ステップを通して、複数の教員が関わる視点を取り入れていく。

- ステップ1：一人でサポートシートを書く。
- ステップ2：同学年の教員を中心に、サポートシートを見てもらい、新たな背景や指導支援方法、将来を見据えた視点について複数人で検討する。
- ステップ3：実際に実践して、子どもの事実を記入する。(有効な支援、指導と有効でなかった指導、支援)
- ステップ4：子どもの行動の改善が見られれば、新たなサポートシートに別の課題を記入する。改善が見られなければ継続指導。

前述したアンケート [表 4] では、困っていることや課題を解決するための方法として、「先輩や同僚に相談」が最も多く挙がっている。つまり、困ったらまず職場にいる同僚に相談する教員が多いということである。だからこそ、サポートシートを手段として、子どもの困っている姿に対応する術を共に考えていけると良い。

iii. サポートシートの感想

今、児童にすべきことが明確になって、「いつかやろう」から「明日やってみよう」と思っていて、日々考えられるようになった。

サポートシートが子ども理解と指導に取り組む意欲につながったことを示している。現場は、子どもに指導する以外にやるべきことがたくさんある。アドバイスを受けようと思っても、ついつい後回しになってしまうこともある。サポートシートを記入することによって、やるべきことが明確になり、やってみたくなる姿勢につながると良い。さらにサポートシートが教師の意欲向上の一助になることも期待している。

iv. サポートシートの活用法

サポートシートの活用法をまとめると次の2点になる。

- ①個々の教師がサポートシートを書くことを通して、子どものアセスメント(実態把握)をする。
- ②サポートシートを使った研修会、学年会議等を通して、複数の目で子どもの実態を把握する。

これらを通して、専門性の向上と担保を目指していきたい。

(2) 本年度の研究成果と課題

i. 成果

本年度の研究成果は次の3点である。

- ①サポートシートにより、複数の視点で児童のアセスメント(実態把握)ができた。
- ②将来を見据えた視点を考え、指導、支援ができた。
- ③行動の背景をもとにした指導、支援の結果、児童が変容した。

今回は、筆者がサポートシート作成に関わったことで、複数の視点で実態把握と指導、支援を考えることができた。複数の視点で考えると、今まで見えてこなかった面も話題となり、子どもを多面的に把握することができる。複数の視点で実態把握をすることは今後も大切

なキーワードとなる。

また教員同士で話をする中で、将来の視点から課題を再検討することもあった。困っているのは子どもであるという視点に気付けることが大切である。一方、課題の背景を考えるとときに教師は子どもにばかり原因を求めがちである。例えば「～ができないのは、子どもが～だから」という思考回路である。しかし今回サポートシートを記入する中で、教師の自らの行為に原因を求めることがあった。例えば、「授業が単調だったからではないか」「声掛けのタイミングが悪かったからではないか」などである。教師が変われば、子どもも変わる。子どもの事実が何よりも大切であると考え。

ii. 課題

本年度の研究の課題は次の2点である。

- ①サポートブック(サポートシート)を活用し、児童の行動の背景と支援、指導を複数考えられる。
- ②専門性向上パッケージのサポートシート以外の項目を充実させ、活用する。

今回は、特別支援学級担任1名を中心にサポートシートを使用して研究を進めた。サポートシートを使用するのは初めてだったこともあり、背景や指導、支援の記入は限界があった。しかし、経験の浅い先生でも指導や支援は行う。まずは、その引き出しを増やすことが大切である。そこで、これまでのサポートシートをまとめてサポートブックとしたい。このサポートブックの活用が子どもの関わり方のヒントになり、専門性の向上につながると考える。また、今回は専門性向上パッケージのサポートシートのみを扱ったが、前述したように、パッケージには他の項目もある。これらの項目を充実させることで、他の教員が活用できるようにしていきたい。最終的には、専門性向上パッケージを総合的に活用することで、個々の専門性の向上と共に、組織として専門性を担保していく仕組みを作っていくことを目標としたい。

iii. 今後

本研究は、2年計画である。来年度は、特別支援学校の教師を対象に研究を行い、サポートシートを含めたパッケージの完成を目指していく。さらに、特別支援学級担任と特別支援学校担任のサポートシートの記入状況の違いを分析しながら、両者の状況を総括していきたい。

いずれ、県内の特別支援学級、特別支援学校に専門性向上パッケージを配布することで、学校種を超えた専門性の向上と担保を目指していきたいと考えている。本研究に興味のある方は、ぜひご連絡をいただきたい。今回の研究成果であるサポートシートの共有と研究の詳細をお伝えする予定である。

武井恒 hisashi212@ybb.ne.jp

5. 参考文献

- 竹林地毅(2014) 小学校特別支援学級担任の専門性向上に関する調査.特別支援教育実践センター研究紀要.12.75-82.
- 千葉県総合教育センター特別支援教育部(2015) 特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査.
- 日野久美子・井邑 智哉・納富 恵子・中山 健(2019) 教員の特別支援教育に関する専門性の資質・能力についての分類-専門性の高い教員を対象とした調査から-.佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要.3.92-97.
- 文部科学省(2019年9月25日) 日本の特別支援教育の現状について.新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議.
- 安田和男(2015)特別支援教育に携わる教員の専門性向上を支援する体制づくり.岐阜大学教育学部教師教育研究.11.11-20.
- 山梨県教育委員会(2020) 令和2年度山梨の特別支援教育.
- 山梨県教育委員会(2020) やまなし特別支援教育推進プラン2020.
- 山梨県立かえで支援学校(2018) 教師の専門性を向上し、担保するための実践的研究.山梨県立かえで支援学校平成30年度研究紀要.